

江戸文人が見た漢字文義謎：近世随筆による記録と 伝承

呉，修喆
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/7170863>

出版情報：言語科学. 59, pp.53-66, 2024-03-11. Kyushu University Society for Language
Studies (KUSLS)
バージョン：
権利関係：



江戸文人が見た漢字文義謎

ー近世随筆による記録と伝承ー

呉 修喆

1. はじめに

漢字文義謎とは、漢字の音・形・義や漢文学の典故などを材料に創作された「謎」である。これを解くには一定の教養が要求されるため、「文人の遊戯」とも称される。中国の漢字文義謎は「古体」「今体」の二大スタイルに分けられるが、古体謎は雑体詩の系統を引き、謎面（題の部分）が長く、韻文形式をとるものの、内容が世俗的で、文体の格調はさほど高くない。それに比べ、清代中期以降徐々に主流となった今体謎は、謎面が短く、読書人向けの文字遊戯として一段と精緻化している¹。

日本では、中国の古体謎から影響を受けた「古典なぞ」が識字階級向けの文学として享受されていた一方、江戸中期以降主流となった「三段なぞ」²は世俗的な言葉遊びとなっている。古体謎のみならず、洗練された今体謎も輸入漢籍とともに日本に渡ったはずであるが、それにもかかわらず、なぜ「古典なぞ」の発展につながらなかったのか。本論文では、江戸期の文人随筆から関連記述を拾い出し、近世日本における漢字文義謎の受容の実態を明らかにしつつ、その文化交渉にまつわる諸問題を考察する。

2. 古体謎の伝来

2022 年秋、東京文京区に位置する日中友好会館美術館で、特別展「～珠璧交輝～清代木版年画＋UKIYO・E」が行われた。そこで展示されていた「暖香塢試製春燈謎」と題される年画の中に、このような謎が書かれている。

三人同日去観花 百友元来共一家
禾火二人相对坐 夕陽橋下一双瓜
打四字

¹ 関連用語の整理は、拙著『燈謎：漢字文化圏文字遊戯の諸相』（東京：文学通信、2023 年 2 月）を参照されたい。

² 「……とかけて……と解く、その心は……」のような形式をとる「なぞ」。日本における「なぞ」の歴史および用語表記は、鈴木棠三『なぞの研究』（東京：講談社、1981 年 4 月）を参照した。

これは典型的な古体謎で、「離合（漢字の字形を分解・組み合わせる方法）」という手法で作られ、答えは「春夏秋冬」である。実際に、年画に書かれている「燈謎」はこれだけではない。手元の資料と対照した結果、この年画に見られる全 15 題の燈謎のうち、14 題が明末の日用類書に見出せることがわかった³。展示図録の解説によると、この年画自体は清・嘉慶年間（1796-1820）、天津楊柳青で製作されたものである。要するに、明代に流行していたこれらの古体謎は 200 年以上にわたって、少なくとも、清の中葉まで民衆の日常生活に深く浸透していたのである。

実はこの謎、水戸藩士小宮山楓軒（1764-1840）の随筆『楓軒偶記』にも記されている。「銚子浦漂着清人の書」の一節で、文化四年（嘉慶十二年＝1807）に日本に漂着した中国人が書き残したさまざまな詩文の中に、この「春夏秋冬」の字謎詩が混じっている。江戸期には、漂着した中国船の乗組員と筆談役を務めた日本儒者の間に、互いの関心事を聞く「筆語」や漢詩文の応酬など、漢字による文化交流が幾度かあった⁴。「銚子浦漂着清人の書」もまたその文化交流の証である。ちなみに、書かれた内容というのは、宋代から人口に膾炙してきた「神童詩」や「山村詠懷」などの漢詩をはじめ、元曲『琵琶記』の科白や、清代初期の才子佳人小説『平山冷燕』に出る詩などが含まれている。要は、オリジナルの創作ではなく、諳んじた詩文をその場で書き出したような具合である。そのうち、字謎詩は全部で三首入っており、「春夏秋冬」のものを除き、ほかの二首は、

凡人不底〔抵カ〕一頭蟲 二十七辺有七人
細雨罩在横山上 朋友無情口半朋
字四字 風花雪月

言在青山不是青 兩人土上説原因
三人騎牛失一角 草木之中有一人
熟語乙句 請坐奉茶

とある⁵。いずれも七言絶句をかたどった俗っぽい詩で、「離合」を成立させるために文意を粗末にしている。『楓軒偶記』では記録のみとなっていて、受け取る側の反応や記録者の感想は知ることができないが、銚子浦の清人漂着より数年先立って刊行された別の書物から、当時の儒者文人がこのような字謎詩をどのように受けとめていたか、微かながら窺うことができる。

その書物とは、文化元年（嘉慶九年＝1804）三月に大坂の定學堂より刊行された都賀庭鐘編『近詩選』である。龍谷大学写字台文庫所蔵のこの本には、字謎詩が四首収録されており、うち一首

³ 呉修詰校訂・訳注『明末日用類書燈謎選集』、東京：文学通信、2023年2月、4-6頁。

⁴ 大庭脩『漂着船物語：江戸時代の日中交流』、東京：岩波書店、2001年8月、227-229頁。

⁵ 小宮山楓軒『楓軒偶記』、百家随筆第二、東京：国書刊行会、1917年10月、133-134頁。

がすなわちこの「春夏秋冬」の謎である。他の三首はそれぞれ「極」「門」「君子不器」を答えとするものであるが、それらもすべて明末日用類書に見出すことができる。序文にある「高調雖佳、非所以弘斯文。今也不論世与人、拔其近浅而訓詁于傍、蒙学如可至也（高調佳なりといえど、斯文を弘むる所以にあらず。今や世と人を論ぜず、その近浅なるを抜きて傍に訓詁し、蒙学如しには至る可しなり）」の二行から、タイトルの「近詩」は「近浅な詩」を意味することがわかる。そのうえ、字謎詩を含めた近浅な詩は、初学者向けに斯文を広めるのに役立つという認識も読み取れる。編者である都賀庭鐘（1718-1794）は、初期読本作者として名高い。彼が残した読書筆記『過目抄』には、数多の漢籍から得た豊富な教養が詰まっている⁶。『過目抄』の抄録書目一覧⁷には入っていないが、江戸にもたらされた日用類書または中国の謎集を読んでいた可能性は十分にある。たとえば、向井富編「商舶載来書目」享保十二年（1727）の項に、『一夕話』一部六冊、『又一夕話』一部五冊が日本にもたらされたという記録が残っている⁸。『一夕話』と『又一夕話』は清代において繰り返し翻刻されていた咄咄夫による雑文選集で、中に計 200 題前後（版本によって増減する）の「雅謎」が収録されており、『近詩選』に採録された「極」「門」「春夏秋冬」の謎もそこに含まれる。

以上 2 点の資料、『近詩選』と『楓軒偶記』より 2、30 年ほど遅れて、江戸の雑学者山崎美成（1796-1856）は、彼の考証随筆『海録』巻 12 第 17 条「謎第二」に、『近詩選』から「極字詩謎」を抄録し、さらに、同じ条の頭注に、「清水水清」「寧波波寧」という対句を記した⁹。この対句は、文政九年（1826）春、中国寧波から遠州清水港に漂着した得泰船の船主と代官羽倉氏の間でかけあつたものである¹⁰。謎ではないが、双方かけあつて楽しむ文字遊戯である点においては、文義謎と対句は近い関係にあるといえる。美成は両者に類似性を見出したからこそ、あえて「謎」の条に注記したのかもしれない。突きつめていえば、それは、漢字漢文という文化の底流でつながる者同士の、知的なかけあいでもあるのではないだろうか。

随筆の中に和漢の文字遊戯に関する記述を残した近世文人はほかにもいるが、前述した山崎美成は人一倍文義謎に強い関心を示した。『海録』だけでも、和漢の文義謎類が 36 例、関連書物が 37 作挙げられている。山崎美成の漢字文義謎蒐録に関する詳しい論述は別稿に譲り、本論文では彼以外の文人による随筆に注目したい。以下、各随筆から拾い出した関連叙述を三つのテーマに分け、整理と考察を行う¹¹。

⁶ 木越治「本を楽しむ 都賀庭鐘の読書筆記『過目抄』のことなど」『書物学 = Bibliology』2、東京：勉誠出版、2014 年 5 月、55-59 頁。

⁷ 劉菲菲『都賀庭鐘における漢籍受容の研究：初期読本の成立』、大阪：和泉書院、2021 年 3 月、211-222 頁。

⁸ 大庭脩『江戸時代における唐船持渡書の研究』、吹田：関西大学東西学術研究所、1967 年 3 月、660 頁。

⁹ 山崎美成『海録』、東京：国書刊行会、1915 年 11 月、329 頁。

¹⁰ もとの記録は羽倉簡堂『清水筆語』（国文学研究資料館所蔵「IIIF Discovery in Japan 収録」https://cultural.jp/item/iiifman-kotenseki-nijl-ac_biblio_200020264）に見える。

¹¹ 引用部分は原文の訓詁訓点を省略し、読みやすくするために、適宜句読点をつけ、形式を整えた。漢字は原則として新字体を使用するが、一部謎を解くために必要な旧字は元の字形のままに留めた。原文割注は（ ）、筆

3. 「硯蓋銘」とその模作

3.1. 黒川道祐『遠碧軒記』

黒川道祐（1623-1691）は、江戸前期の儒医。名は玄逸、字は道祐。静庵・遠碧軒などと号す。儒学を林羅山・鷲峰父子および外祖父の堀杏庵に学ぶ。道祐の父である黒川光信（寿閑）も儒医である。宝暦六年（1756）に編まれた『遠碧軒記』の下之三に、「古き唐之硯之蓋之上類之銘に云」の一節があり、そこに「硯蓋銘」3題が記されている。

岩上崩裂、篲竹摧敗。姜已女去、孟子未来。

岩の字は上の山を去れば石の字なり、篲の字上の竹を去れば見の字なり、二字にて硯の字なり。姜の字の女を去れば羊の字なり、孟子の子の字を去れば皿の字なり、羊の字と皿と合て蓋の字なり、合て硯蓋と読なり。

亦予父曰、未頭生角、氷無一点。

未の字の頭にノをすれば朱の字なり、氷の上の一点を去れば水の字なり、次の二句は如前合而朱水蓋と読なり。

又曰、未頭生角、早上加点。

早の字の上二の字の二点を加れば卓の字なり、朱水蓋、朱蓋、朱卓蓋、三色あり¹²。

いずれも離合型の字謎であるが、冒頭の1題は中国の宋明時代から広く伝わってきたもので、いくつかの異文が確認されている。たとえば、宋・章樵（生没年不詳）『古文苑注』巻8「離合作郡姓名字詩」の注記および明・馮惟訥（1513-1572）が編んだ『詩紀』の別集巻12には「研石猶在、峴山已頽。姜女既去、孟子不来」とある¹³。また、陳繼儒（1558-1639）『精輯時興雅謎』と馮夢龍（1574-1646）『山中一夕話・謎語』では、「礬止有石、峴更無山。姜女既去、孟子不還」に作る¹⁴。

ところが、光信から伝え聞いたという後ろの二題は、他の資料では未見のため、おそらく中国から伝わった「硯蓋銘」の模作であろう。模作といっても、四句ではなく二句になり、長さが半分しかない。「未頭生角」で「朱」、「未頭生角、氷無一点」で「朱水」、「未頭生角、早上加点」で「朱卓」と解いて、三種類の蓋に対応するようだが、「蓋」と解く部分は書かれておらず、「硯蓋銘」の後半二句をそのまま使うかは不明である。いずれにせよ、文意が通っているとはいいが

者による文字校正・補注・現代文訳は〔 〕で示し、Unicode 外の文字は、Unicode 文字に改めた。

¹² 黒川道祐著／難波宗建編『遠碧軒記』、日本随筆大成（新装版）第1期10、東京：吉川弘文館、1975年9月、138頁。

¹³ 章樵『古文苑注』、中国国家図書館蔵、王嶽明発行、1499年、第4冊23コマ。馮惟訥編『詩紀』、中国国家図書館蔵、甄敬発行、1560年、第40冊60コマ。

¹⁴ 高伯瑜等編『中華謎書集成』第1冊、北京：人民日報出版社、1991年5月、76・96頁。

たく、「硯蓋銘」の完成度には遠く及ばない。

日本では、『遠碧軒記』以外に、半世紀ほど遅れて刊行された桂川中良（1754-1810）『桂林漫録』に「篋竹壊裂、岩山崩摧。姜女既去、孟子不来」と「研石猶在、峴山已頽。姜女既去、孟子不来」¹⁵の二種の異文が見られる。ただし、中良の重きは和漢における謎の比較に置かれているため、模作等の記述はなかった。また数十年遅れて、『古文苑注』『詩紀』と同文の「硯蓋銘」が、日尾荊山（1789-1859）『燕居雜話』巻6に登場する。ようやく、荊山によって新たに模作が行われたのである。

3.2. 日尾荊山『燕居雜話』

『燕居雜話』は、江戸後期の儒者日尾荊山が和漢の書を渉猟し、人に回答したもの、または自らの備忘に書き留めたものをまとめ、天保八年（1837）頃に完成した随筆である。巻6「東坡硯蓋銘」の項では、荊山は明・徐渭（1521-1593）の『青藤山人路史』を出典に、「硯蓋銘」が蘇軾の作と伝わっていることを明記した。さらに、「一時のすきみながら、録して児輩の弄びにそなふ」ものとして、「硯蓋銘」に倣って作った下記の「筆篋銘」と「杯篋銘」を書きつけている¹⁶。

小竹横津水不見 筆
水辺有鳥、兩人不来 酒市〔「市」同「匠」〕

かつて黒川道祐が父光信から聞いた模作銘に比べ、荊山のこの2題は、倣って作ったという割には字面がさほど似ておらず、文意が明らかに洗練されていて、情景が目には浮かぶほど詩的言語としての機能を有している。また、簡単ではあるが、「鳥」から「西」への文字転換もされており、単純なパズル的字形表現から一步抜きん出ている。端的にいうと、中国の今体謎とほぼ変わらない。漢籍を享受するなかで古体謎に触れ、今体謎にきわめて似た作風で漢文謎を自作した日本人はほかにもいる¹⁷が、近世随筆の中では、管見の限り、自分で模作を行ったと明確に書いたのは荊山だけである。本人は筆の遊びとしか思っていなかったようだが、創作背景を含めて、批評に堪えうる文義謎となっているといえよう。

ちなみに、近代中国における今体謎の流行は、「謎話」という批評ジャンルの形成と深く関わっている。言い換えれば、批評の俎上に載せられることによって、今体謎は文学の一種として精緻化が促されたのである。日本では、古代から中世にかけて、宮廷では「なぞなぞ合わせ」、民

¹⁵ 桂川中良『桂林漫録』、日本随筆大成（新装版）第1期2、東京：吉川弘文館、1993年6月、297頁。

¹⁶ 日尾荊山『燕居雜話』、日本随筆大成（新装版）第1期15、東京：吉川弘文館、1976年1月、332頁。

¹⁷ 中世の公卿、中御門宣胤（1442-1525）は「秋色維縻五行終（漢字「泉」と解く）」など数題の「中国風のなぞ」を作った。鈴木棠三編『中世なぞなぞ集』、東京：岩波書店、1985年5月、157頁。

間では連歌俳諧の集いで「なぞ」が行われ、かけあいの方はあったが、批評は見当たらない。それに比べ、近世随筆は批評を行うのに格好の媒体であるものの、すでに古典「なぞ」が衰退し、「なぞ」の自作を試みる文人はごく稀になっていた。いわゆる「文人サロン」は、見聞を披露しあう場ではあっても、自作の「なぞ」を持ち寄って交流するような場ではなかった。

日本近世における随筆類は、今日のエッセイと異なって、宋・洪邁（1123-1202）『容齋随筆』などの漢籍から「随筆」の概念を受け継ぎ、さまざまな書物や記録の中から関心のある記事を蒐録し、興味の赴くままに考証や感想などを書き加えた読書筆記のようなものである¹⁸。おそらく荊山にとっても、模作を書きつけるのが目的ではなく、「世に弄ぶ東坡硯蓋銘といふ庾〔庾〕辞、何者のしわざにやと訝」¹⁹ったことに起因し、自らの好奇心を満たす目的もあって、『青藤山人路史』という「たしかなる出拠」を提示したにすぎなかったのだろう。近藤奎の『中国学芸大辞典』などでは『青藤山人路史』のジャンルが詩話とされているが²⁰、実際には、詩に関する記述は一部に過ぎず、その多岐にわたる内容を鑑みれば、まさに随筆の類に属する。詩詞などの典故のみならず、風俗や用字法などに関する記事も含まれる『青藤山人路史』は、しばしば近世随筆に引用され、さまざまな事象の「たしかなる出拠」として愛読されていたようである。

近世随筆のこういった性格に影響され、江戸文人の漢字文義謎に対する関心のほとんどは、考証につながっているように思われる。そして、考証の目的は基本的に、自国の文物と比較し、遡源または格付けすることであった。

4. 考証と比較

4.1. 桂川中良『桂林漫録』

桂川中良は、江戸後期の蘭学者、戯作者、狂歌師。狂歌、稗史、語学、中国小説を好み、平賀源内に師事する。寛政十二年（1800）刊の随筆『桂林漫録』上巻では、前記の「硯蓋銘」異文の後ろに、

小児の謎語（ナゾ）に皿と云ふ事を、宰相はだかで、虎の頭を取（トル）。又、茶碗と云事を、深山路や深山かくれて、清（スム）犬の一声、などと云ると能く似たる趣向なり²¹。

と書かれている。ここに挙げられている「小児の謎語」2題を説明すると以下のようになる。

¹⁸ 揖斐高『江戸の文人サロン：知識人と芸術家たち』、東京：吉川弘文館、2009年10月、129-132頁。

¹⁹ 「世に弄ぶ東坡硯蓋銘といふ庾〔庾〕辞、何者のしわざにやと訝りしが、青藤山人路史に、蘇長公作硯蓋字云、研石猶在、峴山已頽、姜女既去、孟子不来、とあるにて、たしかなる出拠あることを知れり。」日尾荊山『燕居雜話』、前掲、332頁。

²⁰ 近藤奎『中国学芸大辞典（改訂版）』、東京：元々社、1959年1月、684頁。

²¹ 桂川中良『桂林漫録』、前掲、297頁。

宰相はだかで、虎の頭を取 皿

〔「宰相」が裸、すなわち「衣裳」を除くこと。「さいしょう」から「いしょう」を除けば「さ」が残る。「虎（とら）」の頭は「と」、それを取れば「ら」が残る。「さ」と「ら」が合わされば「皿（さら）」〕

深山路や深山かくれて、清犬の一声 茶碗

〔「深山路や」の「深山」が隠れれば、「路（ち）や」。ここの「清」は「ち」を清音にすることを意味する。「犬の一声」は擬声で「ワン」。合わせて「茶碗（ちやわん）」〕

これらは典型的な古典「なぞ」で、技巧で分類すると「賦物型」となる。「賦物型」の謎はすなわち、連歌の句に所定の語を詠み入れる「賦物」という技巧を駆使しているもので、主な手法として、仮名の入れ替え・消去・挿入・転倒などがある。解き方がわかると、中良のいう「能く似たる趣向」に納得するだろう。要するに、中国の離合型字謎詩のバズルの趣向を、字形のパーツから音節のパーツである仮名に敷衍したような作り方である。短い感想でありながら、中良は「賦物型」と「離合型」の類似性を敏感に捉えている。

さらに、『桂林漫録』下巻「市語」の条では、数字をあらわす和漢の隠語を比較している。

往年薩州の人の、隠語（カクシコトバ）にて豁拳（ケン）を打を見たりしが、「一をたんそこ。三をよこがは。七を毛の尻。九を丸まらず」などと云いたるを、興あることのみ聞過せしが、此頃『堅瓠集』に、『委巷叢談』の市語を載しを見て、始めて唐山（カラ）の市語（フチャウ）なる事を知る。「杭人三百六十行。各有市語。（中略）不若吾郷市語有文理也。一為旦底。二為断工。三為横川。四為側目。五為鬻（カツ）丑。六為撒大。七為毛根。（一作皂脚）八為入開。九為未丸。十為田心。」全く是より出たるなり。東都の一大利に、数字の瘦辞（カクシコトバ）あり。「一（大無人）二（天無人）三（王無中）四（罪無非）五（吾無口）六（交無人）七（切無刀）八（分無刀）九（丸無）十（千無）」、これも亦文理あり²²。

中良はまず、薩州人が豁拳する際に使う数字隠語を清・褚人穫（1635-?）『堅瓠壬集』巻1「市語」から発見する。「不若吾郷市語有文理也〔わが郷の市語ほど文理を有しない〕」というコメントは『堅瓠集』からの引用で、「吾郷」はすなわち褚人穫の出身地長洲県（現在の蘇州市に位置する）であるため、この記述から、蘇州地域の隠語が日本の薩摩藩に伝わっていたことがわかる。そして、引用の後ろに、中良は比較対象として日本に見られる数字隠語を挙げた。「東都の

²² 桂川中良『桂林漫録』、前掲、318頁。

一大利」というのはどうやら浅草観音堂を指すようである²³が、この系統の隠語は僧侶の間だけでなく、多少変化した形でさまざまな業界に伝わっていたと思われる²⁴。『堅瓠集』に倣って、中良も隠語における「文理」の有無を注目点としているが、ここの「文理」は果たして何を指しているのか。

楮人穫は、「文理」の比較対象を明・田汝成（1503-1557）『委巷叢談』から取っている。ついでに『堅瓠集』の原文を見てみると、中良に中略された「各有市語」の後ろの文は以下のようになっている。

不相通用、倉猝聆之、多不能解。又有四平市語、一為憶多嬌。二為耳邊風。三為散秋香。四為思鄉馬。五為誤佳期。六為柳搖金。七為砌花台。八為霸陵橋。九為救情郎。十為舍利子。小為消梨花。大為朶々雲。老為落梅風。然義意全無、徒乱觀聽²⁵。

〔（杭州の人には三十六の業界があり、それぞれ市語はあるが）通用はしない。突然聞いたら、ほとんど理解できない。また、四平市語というものがあり、一を憶多嬌、二を耳邊風、三を散秋香、四を思鄉馬、五を誤佳期、六を柳搖金、七を砌花台、八を霸陵橋、九を救情郎、十を舍利子、小を消梨花、大を朶々雲、老を落梅風という。しかし全く意味がなく、いたずらに相手を攪乱するだけである。〕

たしかに、このような隠語を急に出示されたら見当がつかない。使われている曲牌名や三字熟語はそれぞれストーリーまたはイメージが伴うように思われるが、「文理」が否定されているところを見ると、意味から着想するものではないということである。ヒントは発音である。言い換えれば、方言で読めればわかる。とりわけ杭州の人なら、おそらくすぐにこれらの語の頭文字がそれぞれの数字・形容詞と似たような発音であることに気がつくだろう。特定の範囲でしか通じないという点からいうと、隠語としてはむしろ成功している。しかし、それを書き留めた文人から見れば、やはり字形から着想する隠語のほうが理にかなっている。「文理」とはいわば、文字遊戯としての合理性である。

4.2. 松平定信『退閑雜記』

漢籍から記述を引いて、日本で見られる「なぞ」と比較する随筆はほかにもある。たとえば、松平定信（1759-1829）²⁶『退閑雜記』巻13「なぞなぞてふ事あり」の項に、「かけがね」とかけ

²³ 安達常正『漢字ノ研究 訂正再版』、東京：六合館、1910年2月、80頁。

²⁴ 榎垣実「符牒考」、近畿民俗学会『近畿民俗』第17号、1955年10月、63頁。

²⁵ 上海古籍出版社編『清代筆記小説大観』、上海：上海古籍出版社、2007年10月、1350頁。

²⁶ 江戸後期の大名、老中。儒者大塚孝綽に師事する。寛政の改革を主導した後、老中および將軍補佐役を免じられ、藩政に専念することになる。1793-1797年頃の筆記による『退閑雜記』はその頃に著された。

る「なぞ」の後ろに、前述した『委巷叢談』からの抄録が記されている。

かけがねといふ事を出したり、（かけがねは、戸などあかし料に、かねにてつくりたるものなり）浪花の人は、大船とときたり、たづぬれば、みなとにつくといひける、京の人は、女とときける、とのさんにつくといひける、江戸のかるきものは、茶碗酒とときける、とへば、引かけてぬるとは、いひける、もとよりありしにはあらぬを、設けつくりたるなり、されどもいま経説さまにいふも、みなわがこのむところにおし合せて説をなしぬるは、此かけがねの類ひなる事多かめり。

『委巷叢談』曰、古之所謂庾〔庾〕詞、即今之隱語也、而俗謂之謎。人皆知其始於黃娟〔絹〕幼婦、而不知自漢伍挙曼倩時已有之矣。至鮑照集、則有井字謎。杭人元夕多以此為猜燈、任人商略。永樂初、錢唐楊〔楊〕景言以善謎名²⁷。〔『委巷叢談』曰く、古のいわゆる「庾詞」は、すなわち今の「隱語」であり、俗にいう「謎」である。人は皆それが「黃娟幼婦」から始まったものと思っているが、漢の伍挙・東方朔の時にすでにあるとは知らない。『鮑照集』には「井」字の謎がある。杭州では元宵の際にこれを使って「猜燈」の遊戲にする人が多く、誰もが謎解きに参加することができる。永樂初年、杭州錢唐人楊景言は謎に長けることで名を知られていた²⁸。〕

上記和文の部分で記録されている「かけがね（掛け金、戸・障子などを閉めるための金具）」の「なぞ」は、地域によって解き方が異なる。現代人にも馴染みのある「三段なぞ」の形に整理すると下記ようになる。

「かけがね」とかけて、（浪花の人は）「大船」と解く。その心は「港に着く（みな戸に付く）」。

「かけがね」とかけて、（京の人は）「女」と解く。その心は「殿さんにつく（戸の棧に付く）」。

「かけがね」とかけて、（江戸の人は）「茶碗酒」と解く。その心は「（酒／戸を）引っ掛けて寝る」。

近世からはやり出した「三段なぞ」は、中世主流の「古典なぞ」と違って、文字遊戲ではなく、「しゃれ」や「掛けことば」を利用してユーモアを生み出す言葉遊びである。そのため、解き方は当人の着想次第で変わりがちであり、ときにこのように一題多解の状況を作り出してしまう。謎を解くというよりも、むしろ「心」の部分でいかにユーモラスな「オチ」をつけるか、機転を

²⁷ 松平定信『退閑雜記』、日本隨筆全集第14巻、東京：国民図書株式会社、1928年7月、337頁。

²⁸ 原文は田汝成『西湖遊覽志余』第25巻「委巷叢談」（上海：上海古籍出版社、1980年10月、445頁）に見るが、「古之……井字謎」の部分は宋・周密（1232-1298）『齊東野語』巻20「隱語」（上海古籍出版社編『宋元筆記小説大観』5、上海：上海古籍出版社、2001年12月、5786-5687頁）から引用している。

競いあうゲームとなっている。定信はこの事例を経説の多様さに結びつけ、「みな我が好むところに押合わせて説をなす」と評する。まさに儒学者ならではの着眼点といえよう。後ろに続く漢籍からの抄録はその証左である。

4.3. 『嬉遊笑覧』と『梅園日記』

江戸後期の考証随筆においても似たような構成の記事が見られる。たとえば、国学者喜多村信節（1783-1856）による風俗考証随筆『嬉遊笑覧』（1830年刊）第3巻下「詩歌」編に「字謎」の項があり、小野篁の説話でよく知られる「無悪善（さがなくてよからん）」「子子子子子子（ねこの子こねこ、ししの子こじし）」以外に、『千載和歌集』『狂歌百首歌合』に見る「秋心＝愁」「山風＝嵐」「見石＝硯」「草門東＝蘭」などの離合の例を挙げ、「漢土の字謎といふものは是なり」と結論付けている。その後ろには、唐・馮翊（生没年不詳）『桂苑叢談』、宋・莊綽（生没年不詳）『鷄肋編』、元・李冶（1192-1279）『敬齋古今註』、明・田汝成『委巷叢談』と、各時代の中国筆記小説から字謎に関する部分を抄録している²⁹。

そのほか、江戸後期の町人学者北慎言（1766-1848）による雑事181件を含む考証随筆『梅園日記』（1845年刊）第3巻に「銭若干字」の項があり、江戸人が銭を数える際の習慣、すなわち、「幾文を幾字という」誤りについて考証している。曰く、銭の一文は、「一字」ではなく「四字」というのが正しい。慎言は論拠として、室町中期臨済宗の僧、横川景三（1429-1493）『補庵京華集』の「孔方兄八百字」を引き、漢籍『自得語』32巻に見える「千字文謎」³⁰の説話、さらに、明・郎瑛（1487-?）の随筆『七修類稿』に見える「薬方中一字者即銭文之一字、蓋二分半也〔薬方の中の一字はすなわち、銭に書かれる四文字中の一字、けだし二分半という意味である〕」を引き合いに出している³¹。

以上のように、随筆で比較・考証する対象は書物からの文字記録だけではなく、文人らが日常生活の中で見聞した社会言語現象も大いに含まれている。次の節では、戯作者による記述を通じて、文義謎と説話の関係について若干の考察を加えてみたい。

²⁹ 喜多村信節『嬉遊笑覧』2、岩波文庫、東京：岩波書店、2004年2月、283-286頁。

³⁰ 「仏印持二百五十銭示東坡曰、与你商此一個謎。東坡思之少頃、謂仏印曰、一銭有四字、二百五十個銭、乃一千個字、莫是千字文謎乎。仏印笑而不答。〔仏印和尚が二百五十銭を持って蘇東坡に示して、この謎をあなたに解かせよう。東坡は少々考えて、仏印にこう言った。一枚の銭には四文字が書かれている。二百五十枚はすなわち千文字。千字文と解く謎ではないかな。仏印はただ笑って答えなかった。〕」朱懷吳輯／朱宗吳刪『自得語』三十二卷五、早稲田大学図書館蔵、第6冊107コマ。

³¹ 北慎言『梅園日記』、日本随筆全集第10巻、東京：国民図書株式会社、1927年10月、333-334頁。

5. 記録と巷説

5.1. 大田南畝『四方の留粕』

大田南畝（1749-1823）は江戸後期の文人、幕臣、戯作者、狂歌師。名は覃、蜀山人・四方赤良などと号す。晩年、江戸の代表的な知識人として高く評価された。狂文集『四方のあか』の続編として文政二年（1819）に刊行された『四方の留粕』は、南畝の著した序・跋などの短文の選集であるが、下巻の「謎の言葉」という一篇は随筆の観を呈する³²。

内容は以下のようにまとめることができる。まず、謎の由来を中国古典に結びつけ、『左伝』から「山鞠窮」、『世説新語』から「絶妙好辞」を挙げ、明・張鼎思（1543-1603）『瑯琊代醉編』、清・趙吉士（1628-1706）『寄園寄所寄』などに見える「商謎」「猜燈」もその類であると紹介する。次に、日本の古典から小野篁の「無悪善」「子子子子子」などの頓智説話、『枕草子』『何曾歌合』『つれづれ草』『後奈良院御撰何曾』などの中世以前の文献を列挙する。つづいて、近世の初め頃に、京都に住む謎好き隠士宗鉄居士が著した謎百句の書『酸物図』があること、林羅山がその書に「謎癖」という序文を付したことを紹介する。最後に、宝永・明和年間に『御所謎の本』『読うり謎かけぶし』などの謎集が刊行されたことに触れたうえで、南畝が自ら見聞した「なぞなぞ坊主」都春雪による興行や、都下に流行していた「謎の番附」「謎の警句」などの事象を記録する。古から今、遠い中国古典から身近な流行へと、順序よく記述されている。

もう少し細かく見てみると、「山鞠窮」と「絶妙好辞」の故事は古くから伝わっているもので、前者は戦闘中の隠語として使われ、後者は「黄絹幼婦外孫齋曰〔黄絹→色糸＝絶、幼婦→少女＝妙、外孫→女子＝好、齋曰→受辛＝辭〕」という離合法を使った碑文である。前述した「古之所謂廋詞、即今之隠語、而俗所謂之謎。人皆知其始於黄絹幼婦、而不知自漢伍挙曼倩時已有之矣」³³という、和漢ともに広く引用される宋・周密『齊東野語』「隠語」のこの論に影響されたためか、南畝も換喩によるレトリックとしての「隠語」と、語意変移・字形分解をコードとした文字遊戯としての「離合」を、同類の現象とみなしているようである。江戸期に相当流布した類書『瑯琊代醉編』（『琅邪代醉編』とも）³⁴と趙吉士による筆記『寄園寄所寄』は、両方とも当時広く読まれた漢籍で、いくつかの近世小説・随筆に見出せる。しかし、「商謎」「猜燈」はその語彙構造からも推測できるように、謎解きを民俗事象として語る際の用語であり、後ろの小野篁の説話とつなぎ合わせて考えると、南畝は具体的な謎の文例ではなく、謎にまつわる事象に注目しているのがわかる。後半で紹介された『酸物図』という書物はすでに散逸したと思われるが、序文の「謎癖」は林羅山文集に収録されている³⁵。

³² 大田南畝『大田南畝集』、東京：有朋堂書店、1913年2月、129-130頁。

³³ 上海古籍出版社編『宋元筆記小説大観』5、前掲、5786-5687頁。

³⁴ 神谷勝広「浮世草子における『琅邪代醉編』利用：『和漢乗合船』『好色敗毒散』」、同志社大学国文学会『同志社国文学』第70号、2009年3月、56-64頁。

³⁵ 京都史蹟会編『林羅山先生文集』巻2、京都：平安考古学会、1918年8月、129-130頁。

このように「謎の言葉」に相当な知見を披露した南畝には自作の離合碑文がある。彼の随筆『一言一言』には、「牛込行元寺復讐の碑」という記事があり、やはり見聞の記録かと思いきや、寺主に請われて自ら碑文を書いたという経緯が述べられている。曰く、天明三年（1783）十月八日に行元寺で起こった仇討ち事件を記念するために、碑の裏側にこのような詩を書いたのである。

癸卯天明陽月八 二人不戴九人誰
同有下田十一口 湛乎無水納無絲³⁶

最初の句は日付で、離合を使ったのは後ろの三句である。本人の解説によると、「二人＝天」「九人＝仇」「同の下に田＝富」「十一口＝吉」「湛から水を無くす＝甚」「納から糸を無くす＝内」、「富吉」は「天仇」を討った人の名で、「甚内」はその敵の名である。ことの経緯と隠されたメッセージがわかれば、『世説新語』に見える曹娥碑（「絶妙好辞」）の説話や『太平広記』に見える伝奇小説「謝小娥伝」（夢枕の離合で敵の名を知り、復讐に成功する物語）を自然と想起するであろう。さしずめ中国古典小説を受容した戯作者の本領発揮といったところである。

5.2. 中村経年『積翠閑話』

近世随筆は基本的に、書物や記事の抄録を中心とするいわばノンフィクションであるが、伝聞などが含まれる以上、真偽が混交していてもしかたがない。そして、稀に虚構の枠組みを設定している随筆も見られる。たとえば、「気質物」めいた題名をもつ中村経年（1797-1863）の『太平楽皇国気質』がそれである。中村経年は、江戸末期の戯作者松亭金水の本名で、別号積翠道人・松亭主人などがある。内村和至によると、天保六年（1835）刊『太平楽皇国気質』、嘉永三年（1850）刊『松亭漫筆』、安政五年（1858）刊『積翠閑話』はいずれも経年の随筆で、題名は違えど、内容そのものは三作に大きな差異は見られない。題名からも明らかなように、随筆第一作の『太平楽皇国気質』には国学的な気分が色濃く表出しており、また、経年による感想や批判は、「教訓読み物」として書かれている³⁷。『積翠閑話』巻1「用の字の謎」の項を読むと、その虚構性と教訓めいた口調は随筆第三作に至っても変わっていないことがわかる。そこには、かつて来日した朝鮮人が日本人を試すために出したという字謎が書かれている。

むかし朝鮮人来聘のをり、彼国人わが邦人を文盲とや侮りけん。一紙に数字を書して、これを知れりやとて。出すを見るに

³⁶ 大田南畝『蜀山人全集』巻5、東京：吉川弘文館、1908年8月、333頁。

³⁷ 内村和至「松亭金水の随筆をめぐって：『太平楽皇国気質』を中心に」、明治大学人文科学研究所『明治大学人文科学研究所紀要』第43号、1997年2月、188-189頁。

一月又一月 両月共半〔闕字・ママ〕 一山亦二山 三山皆懸倒

上有可耕田 下有長流川 六口共一空 両口不団円

と斯の如く書たり。在あふ人々これを見て、いまだその考へに及ばざる時、常山といへる儒士ありしが、傍より見て微笑つつ、用の字を書て出しけるに。朝鮮人見て秀才をほとほと感じたりといふ。一旦用の字の謎と解しては、次々の人この詩を看て、この詞を会得するは、至て輒き事なれども。不意に是を出されて、忽地それと解しぬるは、常人の克すべきにあらず。思ふに是等のこと唐土にては、旧くより行はれしか。五雜俎にも文字を析て、人の吉凶時勢などを。察することあるを載られたり³⁸。

謎自体は簡単な離合型の旧体謎で、漢籍では宋・周密『齊東野語』³⁹のほか、明・李開先（1501-1568）『詩禪』⁴⁰、明・徐渭『徐文長逸稿』⁴¹と、いくつもの異文が確認されている。日本では、靈元天皇（1654-1732）の『乙夜隨筆』に「不耕田在上、不流川在下」に作る⁴²。そのほか、享保十三年（1728）刊の謎集『背紐』に見られる。とりわけ『背紐』ではこの謎が「朝鮮国謎」という見出しの後ろに収録されている⁴³。この事実から考えると、実際に当時の巷でこのような逸話が流布していたのか、あるいは、謎集を読んだ中村経年が戯作者らしく尾鰭背鰭を付けてそれを教訓物語に仕立て上げたのか、にわかには判断しがたい。

国民国家が成立する以前ということもあり、たとえ経年本人が「皇国氣質」という価値観をもっていたとしても、それは明確に言説化されていない民族的自覚にすぎない。加えて、この半覚醒状態の民族意識はきわめて文書的な教養主義によって支えられているのである⁴⁴。しかし、この「用字謎」の話は、明治以降にときおり雑誌の文章などに引用され、やがて一種のナショナリズム的な言説として語られていった⁴⁵。この事例は、当時今体謎がブームとなっていた中国で、新文化運動の流れの中、謎人らが「国粹保存」のスローガンを高らかに掲げる一連の動きと合わせて考察すると、さらに興味深く感じる。

³⁸ 中村経年『積翠閑話』、日本隨筆全集第14巻、東京：国民図書株式会社、1928年7月、637-638頁。

³⁹ 巻20「隠語」に「一月復一月、両月共半辺。上有可耕之田、下有長流之川。六口共一室、両口不団円」「重山復重山、重山向下懸。明月復明月、明月両相連」と二種の異文が記されている。上海古籍出版社編『宋元筆記小説大観』5、上海：上海古籍出版社、2001年12月、5687頁。

⁴⁰ 「重山復重山、重山向下懸。明月復明月、明月在両辺。上有可耕之田、下有長流之川。一家共六口、両口不団円」とある。高伯瑜等編『中華謎書集成』第1冊、北京：人民日報出版社、1991年5月、11頁。

⁴¹ 巻24「雜著・燈謎」に「上有可耕之田、下有長流之川。一月復一月、両月共半辺。一字共六口、両口不団円」とある。徐渭『徐文長逸稿』、上海：上海雜誌公司、1936年、365頁。

⁴² 靈元天皇著／佐佐木信綱編『乙夜隨筆』京都：大八洲出版、1946年、51コマ左。

⁴³ 上坂氏『背紐（新撰何曾遊び背紐）』、国文学研究資料館蔵、京都：めと木屋勘兵衛、1728年。『背紐』に収録されている全14題の漢文謎のうち13題が離合型の字謎で、さらにそのうち10題が漢籍に見出されることができる。

⁴⁴ 内村和至「松亭金水の隨筆をめぐって：『太平楽皇国氣質』を中心に」、前掲、190頁。

⁴⁵ たとえば、銀亭主人「枯野の下萌 其の四」、海軍有終会『有終』第16巻第7号、1929年7月、107-108頁。

6. おわりに

以上、江戸中後期に書かれた数多くの文人随筆の中に散見する関連記述を収集し、整理・精読することで、漢字文義謎の主な受容ルートが舶来の謎集ではなく、清代以前の筆記小説であったことがわかった。たしかに漂着清人との筆談の中で中国の謎に触れた事例もあるが、書かれているのはいずれも人口に膾炙した古体謎である。随筆に抄録されている中国謎は、しばしば江戸市中の隠語や「三段なぞ」と比較されるが、鑑賞・批評・模倣の対象となるのは稀である。

国文学資料館が所蔵する唐本袖珍本コレクションに含まれている『玉荷隠語・群珠集』（1780年刊）、『東芳謎』（1894年刊）、『隠語彙編初集』（1900年刊）はいずれも今体謎集だが、日本にもたらしたのは明治期以降だと思われる。そのうち、唯一和刻本となったのは明治九年（1876）に翻刻された『玉荷隠語』で、1896年6月に刊行された雑誌『天則』第九編第六号の記事にて言及されている。明治以降の日本近代知識人が中国の洗練された今体謎を目にしていたのは確実であろう。しかし、当時、好古・好事を追求するかつての江戸文人サロンは時流の中で衰退し、古典学芸のパロディや文字遊戯などを媒介にした交遊の場を失っている。中国の文義謎を記録し紹介する人がいたとしても、随筆を綴った江戸文人のように、中国の謎を手本に自作を試みる人は出てこなかった。こうして、日本における漢字文義謎創作の水脈は塞がれたのであろう。

しかしながら、近世随筆は万華鏡のように和漢文人の観察と所感を反射し模様を織りなす。このテキスト群には、解き明かすべき〈謎〉がまだ多く鑿められている。日本における文義謎にまつわるメディアの変遷や、近代以降の文義謎受容についての考察は今後の課題とし、新しい事例が確認されることを期待して稿を改めて論じたい。

付記 本稿は、JSPS 科学研究費補助事業若手研究 21K12940「日本に伝存する漢字文義謎資料のデータベース化による文化史的研究」（研究代表者：呉 修テツ）の成果の一部である。